



農林水産省では、国際機関であるFAOおよびASEAN事務局に対し、拠出金を提供して、1999年から農業の多面的機能に関する調査研究を依頼しており、ともに来年2フェイズ6年間の作業を終える。拠出の目的は、国際的に多面的機能の理解をより進めることにあり、それによりわが国のWTOにおける多面的機能に関する主張の強化を図ろうというものである。筆者はASEANの事業には当初から協力してきた経緯があり、今回、FAOの事業についても情報を得、意見交換することで相互の事業に資するために、このワークショップに参加させていただいた。

FAOのプロジェクトはRole of Agriculture (農業の役割) プロジェクトと呼ばれ、農業の多面的機能より広い概念である農業の役割という概念を用い、農業がどのようにそれぞれの途上国で社会に役立っているかを検討するもので、ASEANでのプロジェクトとはややその色合いを変えている。

最初の2日間は、「貧困削減と食料安全保障のための環境サービス」と題され、アメリカ、ドイツの大学教授を含め、FAOや世界銀行の専門家が、分析枠組みや方法論についての研究成果、事例研究、さらに新たに始められる事例研究の計画の報告と討議が行われた。3日目は、「貧困削減と食料安全保障に関連する農業政策」というテーマで同様に進められた。

最初のセッションで興味深いのは、世界銀行が世界各地で積極的に進めている「環境サ

ービス」と呼ばれるプロジェクトである。農林業がよい環境を生み出したり、またそれを阻害するなどの関連を持つ場合、環境サービスと名付けて貧困削減に役立たせる仕組みをつくることができる。たとえば、大都市の水源となっている場所での農業活動が、水源の機能に影響する場合、農業活動に一定の制限を設け、それを守ることを条件に得べかりし所得を基準に支払いを行う、といったプロジェクトである。これは農業の多面的機能とは異なるが、支払われない公共財としての環境サービスに対して、支払いをするという点では、多面的機能論と考え方を共有する。

これに関連して、インドネシアの森林伐採が水源林としての機能を阻害する場合について、森林に対する所有権の強弱によって、支払いの条件が変わってくる、といったゲーム理論を適用した分析を行った報告などもあり、開発経済学での制度分析が私には興味深かった。

新しく始められる研究の計画発表では、モロッコやタイのプロジェクトが、まさにわが国で考えているような多面的機能の評価に取り組んでいるように思われた。

ASEANにしてもFAOにしても国際機関として、その運営は機関の事務局に委ねられている。相当の努力をしなければ、わが国の望む方向にプロジェクトを進めていけない、との感を強くした。ともあれ、こうしたプロジェクトを実施することで、多面的機能への関心が少しでも高まることは確かである。

ご存じの方も多と思われるがFAO本部は、ムッソリーニ時代の植民地省だった8階建ての建物で、建築制限のあるローマでは数少ない高層建築である。それが、ローマ中心部に近く、カラカラ浴場遺跡の隣に位置しており、食堂のある屋上テラスからの眺めは、並の観光より大いに楽しめるものであった。

もう一つ、本部前の広場は、暴虐の広場と名付けられていた。ナチス時代の蛮行もまた思い出させてくれた会議出席であった。